OLIVEPRESS

No.24
2018 年 5 月　29 日発行

パウロ三木センター
―エルサルバドル教育支援の歩み―

エルサルバドルにおける支援事業のスタート地点となった『パウロ三木センター』を紹介します。創立者のジョヴァンニ・リヴァ師は路上生活の少女を見守るセンターに、オリーブジャパンの働きを尊重し日本の 26 聖人の 1 人、パウロ三木（安土桃山時代のキリシタン、イエズス会宣教師）の名前を付けました。

1993 年、ジョヴァンニ・リヴァ師はエルサルバドルの首都サン・サルバドルの路地で暮らす青少年（主に少女）のための開かれた家『パウロ三木センター』を設立しました。中米を何度も旅をしたことがきっかけで生まれた事業でした。当時、イタリア人、アイルランド人、日本人（オリーブジャパンスタッフ吉見ひかる）、エルサルバドル人のスタッフが駐在していました。

13 年間の内戦がようやく終わりを迎えましたが、街には行き場をなくした多くの子どもや青少年らが、麻薬（安価な靴用接着剤 pega：ペガを代用品として）に手を染める問題が深刻化していました。過酷な現実を強いられたが故の問題です。その時期に、リヴァ師は彼らが憩える場の提供が必要であると考えたのです。

センターではシャワー、休憩、温かい食事をとることができました。また、読み書きを学び、困ったこと

写真：パウロ三木センターに通う子どもたちとスタッフ

上右：吉見ひかる

があれば相談にものってもらえる場所でした。

そこは少女たちが分け隔てなくもてなしを受けることができる場でした。そして生まれて初めて人間らしい生活が保障されるという人生の大きな変化を経験しました。同時に、路地での生活を断つという機会にもなりました。当時、このような支援はあまり例がなく、少女たちに手を差しのべることは、非現実的でスキャンダラスなこととみなされていました。

少女たちは、内戦中、過酷な現実に直面し、結果、中心街の路地に辿りつきました。いくつかの公園には、多くの青少年が盗みや食べるためのお金をたかる等の目的で集まっていました。そして弱い立場の少女は性的に悪用されたり、悪質な麻薬を利用していることも少なくありませんでした。

『パウロ三木センター』が開所される前後、センターのスタッフは路上生活をする少年少女たちの現状を調査するために、頻繁に中心街に足を運びました。“開かれた家”『パウロ三木センター』に招くために、何度も会って、話しをしながら誘い続けました。ようやく少しずつ通うようになっても、利用者のほとんどがピストルやペガを持っている状況でした。彼女たちから信頼を得るまで、想像以上の時間を要しました。センターに入る前に必ず持ち物検査を行い、ペガ、ナイフ、包丁等を預けることを義務付けなければなりませんでした。

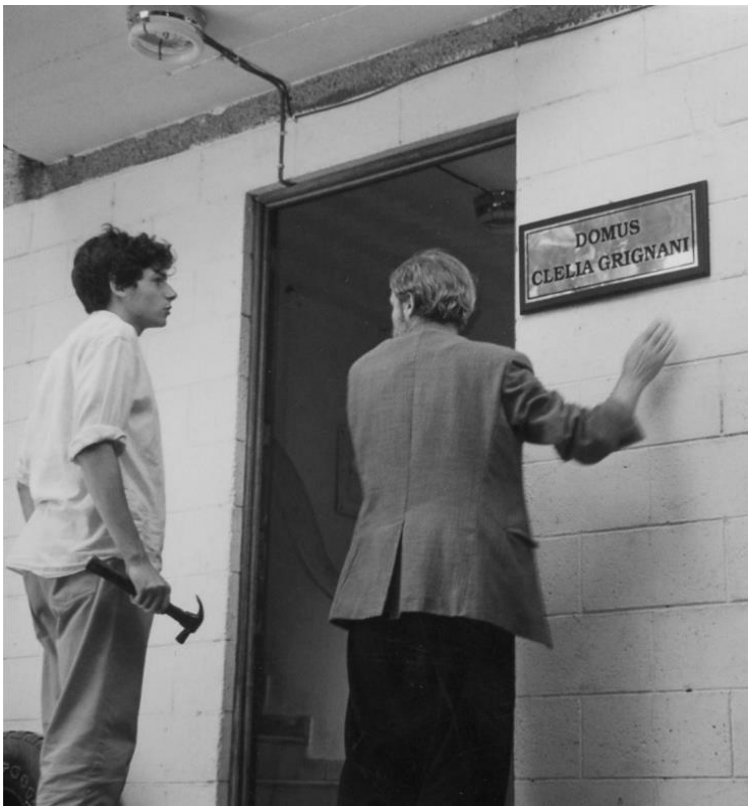
センターでの１日は、石鹸とシャンプーでシャワーを浴びることから始まり、清潔な服に着替え、着てきた服を洗濯します。またグループごとに読み書きや生活指導などを受けました。正午、スタッフと一緒にテーブルセッティングや給仕をして全員同じテーブルを囲んで食事を共にしました。その後、１時間の昼寝、休憩、トランプやテレビ等を観た後、中心街の路地に戻る前に、翌日着る自分の服にアイロンをかけ、自分の服をたんすにしまう習慣を覚えました。夕刻、スタッフは公園まで車で送り届けました。

また週に 1 度は川に水遊びをしにいくなどの遠足がありました。お弁当のサンドイッチ食べている姿はあどけない少女そのものでした。

時には病院や刑務所にいる友だちに、本や仲間の手紙を届けました。あるスタッフの話しです。「ある晩、1 人の少女が頭に重傷を負って入院したという電話を受け、病院に飛んでいきました。彼女の容態が心配であるのはもちろんのこと、路上生活を送る少女を医師や看護師が粗末に扱わないように、誰かが彼女たちを保護していることを知ってもらうためでした」。

『パウロ三木センター』は閑静な住宅街にあったため、その存在を好まない住民がいました。路地の少女たちが出入りするようになったからです。センターの運営がようやく軌道にのってきた頃、住民がデマを流したため、センターは存続が難しくなり閉鎖に追い込まれました。しかしスタッフは、センター閉鎖後も彼女たちに会いに行くことを続け、更生のための協力に専念しました。その成果もあって、極貧で勉学をあきらめていた少女は、看護学校に入学し、無事に卒業しました。

人はどんなに厳しく、希望を失いかける状況に追いやられても、温かく迎えられ友としてもてなしを受けると、その信頼によって心の扉を開け、共に生きることができることを、彼女たちは教えてくれました。家族や住む場所を失った経験を持つ彼女たちは再び得た友情を簡単に断つことをしませんでした。更生を目前にした少女が友を見捨てられず路地へ戻っていく姿を勇敢に感じたのも事実です。　　（文責：吉見ひかる）



共同の家に看板を掛けるリヴァ師と現地の責任者アンドレア

現地の NGO づくり－将来と展望 その３

ジョヴァンニ・リヴァ

（先進国の NGO の資金集めの方法は団体の活動、企業からの助成、世界銀行の助成がある。資金助成の際のポイントは資金の用途を明確にすることである。資金は活動するために必要であり、全てが現地に送付されるわけではない。また、運用するときには為替相場を念頭に入れておき、不測の事態に備えて収支の見積もりを高く設定したほうが望ましい。）前号より

北の NGO について話していますが、もう一つ忘れてはならない大切なポイントは、そのグループの「理念」です。なぜそのグループは生まれたのかそれぞれの歴史と理念があると思います。人と人との友情があり、目的は一つなので共に働くことができます。そのグループのアイデンティティーを深めたり大切にすることは大きな仕事です。もしそれらを放っておいて具体的な問題のことばかり考えてしまったなら、時間がたつと、一緒にいる目的を見失い、熱意が冷めてしまいます。

私は昔から色々な活動をしています。学校の設立をはじめイタリアで NGO（中南米・メキシコ・アジア協会）を組織して、中南米で活動を始めたのですが、理念はいつも同じであり、そこで働いている人との絆を大切にしていかなければならないことを強く信じています。一緒に働く共同体は、ただそのプロジェクトを実行するためだけのものではなく、友情を実行し、その友情が生みだした理念を生かし続けるものです。お互いに良い資料を交換し、一緒に読んだり考えたりすることによって、始めた活動のモティベーションを益々深め、自分たちの間の友情も深めます。さらにやる気も沸いてきます。精神的に生き生きとしている人は、自分の中に閉じ籠らずに社会の動きに敏感になり、その変化を友人と共に考え、少しずつ始まった時と同じ意識を思い出しながら、新しい状況の中でも根本的な意識を持ち続けて対応していく事ができるのです。

以上、北の NGO について話しましたが、次に南のカウンターパートについて話したいと思います。身近な経験から一つのエピソードを伝えます。かつて、私は南米に向かう飛行機の中で、エルサルバドルの学生のグループに出会いました。そして彼らと話しているうちにエルサルバドルを見てほしいと招かれたのです。私はそこですぐに向かいました。私は彼らたちの友人になり、エルサルバドルのストリートチルドレンの問題を知り、一緒に何かをしようという提案が生まれました。そして少しずつ活動が始まったのです。私の判断基準を説明すると（勿論これは私の判断基準なので皆さんは自由に受け取ってください）、私はまず人に出会ってから活動を考えます。人に出会わないと活動は生まれてきません。ある人に出会ってその人はどの程度困っているのか、何に困っているのか、何が必要であるのか、その人との出会いが行われたからこそ考え、何か活動が始まります。出会いは様々ですが、ある人に出会ってその人の話を聞き、一緒に考えたりしていくうちに必ずその人の声の中にある希望と自分の希望との間に共通点を発見します。ですから少しずつ互いの絆は身近なものとなり、そして友人になることもあります。

援助の方法も色々とありますが、例えば、現地のある困っているグループは病院を建設したいのですが、そのための資金がないので北の NGO に頼んで援助を受けます。しかし、北の NGO はただ資金援助をするだけで後の事業には責任を持たず、現地の人々にすべてを任せます。もう一つの例は、現地の人々を一緒に働かせないで、例えばある国から専門家などが派遣されて病院を建て、すべて事業を完成させて自分の国に戻るというケースです。大きく分けてこのような 2 つの例の方法があります。その中に細かな方法がありますが、しかし私たちの方法はそのどちらでもなく、この真ん中です。必ず私たちの中のボランティアの誰かが現地に行き、現地の人々と共に働きます。

（1994 年 11 月 26 日講演）次号に続く

ジョヴァンニ・リヴァは「友情こそが真の平和を作る」という理念のもと、祈り、教育、働きについて絶えず若者に教えました。オリーブジャパンと各国のカウンターパートの活動はその教えを礎としています。

INFORMATION

私はイタリアで中学生のときから、オリーブジャパンのカウンターパートである“I Santi Innocenti (見捨てられた児童の会)”に参加していました。現在私は日本語を勉強しており、イタリア語を教えることで“語学学習に対するリベンジ”を狙っています。

イタリア語の文法はとても難しいので、まず、各アルファベットの正しい発音の仕方から学び始めました。授業はまず前回のレッスンのおさらいから始まり、その後 30～40 分ほど新しいトピックを説明します。生徒が活発に学べるように、いくつかの単純な文章を読んだり、話したりしてもらいます。最後は生徒の興味が湧くようなテーマ、例えばボディランゲージなどについて勉強します(イタリア人は何かを説明するとき、ほとんどの場合ジェスチャーを使います。イタリア人の手の動きを見れば、その人が怒っているのか、喜んでいるのか、悲しいのか、はたまた冗談を言っているのか理解できます)。

なぜイタリア語はそんなに難しいのでしょうか？それは複雑な文法に起因しています。名詞と形容詞の形は、その性別（女性または男性）や数（単数または複数）によって変化します。人間や動物だけでなく、物にも性別があるのです！例えば“tavolo (机)”は男性名詞、“sedia (椅子)”は女性名詞です。さらに動詞の形は主語（私、あなた、彼／彼女、私たち、あなたたち、彼ら）によって変化し、動作する時間や文脈によって多様に変化します。しかもルール通りでないこともよくあり、例外的な変化になることが普通です。

しかしながら、もしあなたがこの文法の難解さを乗り越えれば、イタリア語が大変詩的な言語であることを発見するでしょう。そしてイタリア語を少しでも理解できると幅広い文化を知ることができ、たくさんの良い友だちに会えることも分かるでしょう。

あなたとお会いできることを楽しみにしています！ciao！

講師：ピエトロ・ヴェッキ

講座・チャリティーショップの収益金はすべてイタリアの I.S.I を通して、中米の貧困に苦しむ子どもと若者の教育支援事業に充てられます。

6月　23日・24日　　チャリティーショップ開催　本山生協会館　2階　ルームⅠ

チャリティーショップで販売するための物品提供をお待ちしています。連絡先　080-4306-1057（鈴木）

エルサルバドル便り

エルサルバドルに来てから約 6 ヶ月が経過しました。最近はメキシコ、グアテマラ、ホンジュラスの仲間と集まる機会があり、また日本食を作って食事会をしたりと大変賑やかです。今こちらで注目されている大きな計画は、なんと、みつばち保育所の新しい学び場建設です。長年使って来た場所よりも広く大きな建物で、子どもたちにより良いスペースを提供したいという仲間の気持ちがよく分かります。新しい学び場は 6 月から 7 月頃にできる予定で、皆で完成を待ちわびています。（柴田暁央）

オリーブジャパンのホームページを開設しました。ぜひ、お立ち寄りください。http://olivejapan.sakura.ne.jp/

会員募集

オリーブジャパンの活動に賛同していただける
会員の方を随時募集しています

・賛助会員（一ヶ月一口 10,000 円）
・正会員　（一ヶ月一口 5,000 円）
・協力会員（一ヶ月一口 2,000 円）
・参加会員（一ヶ月一口 1,000 円）
・同調会員（一ヶ月一口 500 円）

振替口座番号
００８９０－１－２４５８２

会員の皆様には、会報「オリーブ・プレス」と
講演会、バザー等のご案内を
優先的にさせていただきます。

郵便振込用紙に必要事項と会員の種類、
納入方法（月払い／年一括）をご記入の上、
会費を納入ください。

オリーブプレス　Vol.24　2018 年 5 月発行
オリーブジャパン国際開発協力協会　olivejapan80@hotmail.com　編責　：オリーブプレス編集部